

## 要約

本博士学位申請論文の目的は、日本の1960年代に誕生した前衛的「暗黒舞踏」の踊りでの鍵概念となる「なること」を、「生成変化」という哲学的な切り口から、アフェクト論に基づいて人類学的に考察することにある。具体的には、1970年代の暗黒舞踏のオーラルヒストリーおよび現在のワークショップを事例として、踊りの身体性と指導の言語的イメージに注目し、アフェクトの流動と「なること」の可能性について論じる。

本論文は四部から構成され、序章と終章を加えた全九章からなる。第一部は本研究の背景と文脈を明らかにする。そして、第二部はさらに暗黒舞踏の歴史的背景と踊りの生成を提示する。第三部と第四部はとくに暗黒舞踏における鍵概念としての「なること」を検討し、前者は身体性とそのアフェクト、後者は言語的イメージとその可能性に焦点を当て、ドゥルーズとガタリのいう生成変化を考察し発展させる。

序章では、本論文の目的、理論的背景、哲学からの切り口を述べて、調査の概要を提示する。

第二章では暗黒舞踏の「なること」をワークショップの場所、参加者、舞踏家である講師との関係に文脈付ける。そこで「なること」は様式によるものでなく、舞踏家が自分の信念をもとにして、場所と参加者に応じて即興的に行っていることを指摘する。つまり「なること」の実践は事前に定まっておらず、必要に応じて多様であることが明らかになる。その背景には、舞踏家が1970年代からやってきた暗黒舞踏とその「なること」を短期間で伝えることの不可能性も無視できない。

第三章では1960-70年代に土方巽が創始した暗黒舞踏（以下舞踏）における身体・肉体の位置づけと、アスベスト館での土方を中心とする共同生活の意義を、舞踏家たちからのインタビューに基づいて考察する。その時代に舞踏家になることはどのような社会的意味があったのか、彼らの共同性はどのような意義があったのかを明らかにする。その模索は環境にあるモノと出会い、その刺激を以て肉体の「生」に触れることであった。舞踏家たちは一般的なライフコースからはずれ、自らの生き方に踏み込み、そこから社会に排除された肉体を認めて肯定することができたと論じ、その肉体に肉薄するためには個人の行為のみならず、共同性をもった日常実践の積み重ねが不可欠であったと主張する。

第四章では舞踏家たちへのインタビューをもとに、1969年から1978年までの舞踏家によるショー・ダンスやストリップ・ショーを検討しその意義を考察した。ショーへ

の出演は、生活費や舞台上演の資金稼ぎのために必要な活動であったことを明らかにする。舞踏家たちがショーに派遣され、資金を稼ぐことにもなり、その資金で作品の上演や、稽古場での共同生活が可能になったことを提示する。彼らがキャバレーで踊り子として出演したことは、そこで得た低い社会的地位ならびにそこでの経験がいかに関係者に影響をし、彼らの踊りをどのように生成させたのかを明らかにする。彼らがショーに出演するという経験の中で、暗黒舞踏かショーか、あるいはアートかエンタテインメントかという区別がつかないケースもあり、暗黒舞踏とショー・ダンスの形態は確かに異なっているが、根幹は同様であると論じる。稽古の中で踊りを模索した結果、暗黒舞踏とショーという二つの形態が誕生したわけである。このことは、彼らが「ショーと舞踏」ならびに「芸能と芸術」を区別しつつも、同時にその二項対立に囚われていない証左であると述べる。

第五章は現在のワークショップで「なること」ができない事例を取り上げて、その身体性を検討する。より具体的には、第三章と第四章でみられた「師匠との近い関係」ならびに「身体運動の必要性」が欠如しているため、「なること」ができないと考察する。とはいえ、身体性をとおして講師と参加者との間、または参加者の間にアフェクトが流動したということを示す。そして共に経験を積むことでアフェクトが蓄積すると同時にアフェクトの流動がさらに可能になることは、雪崩が山の上から落ちてくる際、大きく速くなりつつあるように、アフェクトが拡大することであると論じる。

第六章で観察者は相手の「なること」が見えたと言う観察者を分析の中心に据える。観察者はどのような姿勢で、どのような関係の中でその「なること」を認めるのかを提示する。観察者の視点から、踊り手の身体がいかに関係者に示しているかを分析し、観察者の主観を強調する。その主観から暗黒舞踏における「なること」は一体どのような現象なのかをなるべく具体的に示す。それは、踊り手のアフェクトと共に、観察者のアフェクトも「なること」が生成させていることであると論じる。つまり、暗黒舞踏における「なること」は踊り手と観察者が共に構築する、共有の身体的経験である。

第七章では舞踏家という言語的イメージがいかに関係者の記憶または想像、感情、感覚を喚起させ、動きを導くことができるかを検討する。「なること」は創造であるのに対し表象は再生産であるという議論を提示し、参加者の動きが創造なのか、あるいは再生産なのかが「なること」の可能性につながると論じる。また、主体がいかに関係者の置かれている位置、その身体的状態から創造すなわち「なること」に接近できるのかを考察する。動くことに創造して「なること」の可能性を見出せる場合、「なること」への条件と鍵は主体の姿勢と想像力であると論じる。想像力を生かせば、言語的イメージは踊り手の環境の構

築に影響し、その結果として踊り手のアフェクトそのものも生成させることになる。しかし、踊り手は受動的にその言語的イメージを受け取るだけでなく、自分の感覚と気持ちも生かせるように自分なりの接近の仕方を実施しないといけないと述べる。

第八章は主体が多数の「なること」の身体経験を扱う。まず、動きを生かし言語的イメージを身体的リアリティーにする可能性を提示する。そして複数の「なること」は、どのような「主体・他者」という二項対立のなかで、またどのような順番で行われるのかを明らかにする。舞踏家たちの言語的イメージでは、主体と他者のアフェクトは対立するものではなく、むしろ動きと「なること」を共に生成させることを示す。その中、「主体と他者」という二項対立が破綻し主体の二重性になれると論じる。ドゥルーズとガタリが論じる「マイナー性になる」という二項対立の代わりに「素人になる」という二項対立を提示する。さらに、複数の「なること」は同時に発生をしアフェクトが多重になるので、「なること」の有様は軌道というよりもアレンジメントという一点において深まっていく形であると論じて、ドゥルーズとガタリのいう「なること」の順番を批判する。

終章では暗黒舞踏を踊ることはアフェクト論とその人類学およびドゥルーズとガタリのいう生成変化においてどのような新しい示唆を与えるのかを明らかにする。最後に本論文の事例と考察をもとに、身体が日々刻々と変化していく中で、出会いを通して未知のアフェクトができるようになることであるとすれば、踊りはそれがあつ時間とある身体に凝縮していることであると結論づける。踊りあるいはパフォーマンスを通して、人は何になれるか、どのようなアフェクトができるか、そしてこれは日常の中の生成変化とアフェクトに関して何を示唆しているかをさらに問うことを今後の課題としたい。